

親子礼拝説教ガイド

2023年9月



日本キリスト教団平塚教会

【年間テーマ】自分の願いを知る

ひとつのことを主に願い／それだけを求めよう

(詩27より)

【9月のテーマ】 楽しみにしていること

年間で「自分の本当の願いを知ること」をテーマにしています。

どんな願いでも、自分の願いごとを実現させるためには人との協調が必要です。世で争いが起こるのは、人が自分の願いに固執するからだという面が大いにあります。平和月間だった先8月は「一人で？／一緒に？」をテーマに一人で願うことと一緒に願うことを考えました。

自分の本当の願いは、大きな楽しみを感じることと関係があるに違いありません。自分ひとりの楽しみと、ひとと協調して何かをする喜びは、一方が良く他方が悪いということではありませんが、違った種類の喜びです。そのことを意識しながら、今月は、改めて自分にとって大切なことを考えますことにしました。

教会学校の生徒たちは、学校で友人関係に悩みは抱きつつも、他方、友だちと協調することの大きな喜びを知っています。

9月3日 ガラテヤ書 第4章15節

あなたがたが味わっていた幸福は、いったいどこへ行ってしまったのか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとしたのです。

《聖書理解のために》

ガラテヤの教会は、パウロ(ガラテヤ書の著者)の指導で信仰の幸せを知りました。「自分たちには何の功績もないのに神に愛されている」と知った結果、ガラテヤの人たちは人を深く愛せるようになりました。実際に、愛するパウロが病気になった時には自分の目をえぐり出しても与えたいと思った程でした。自分の損得を問題にしない程に隣人を大切に思えたことが、当時のガラテヤの信徒の「味わっていた幸福」です。

ところがパウロが去った後「神に愛されるには立派な行いが必要だ」と主張する教会指導者がガラテヤに来ました。そのために聖書の教えは喜びではなく厳しい負担になり、教会の信仰は歪みました。ガラテヤ書は、信仰を元の良い状態に戻そうとして書かれた手紙です。

《説教作成にあたって》

信仰が最も健全だった時、ガラテヤの信徒たちは自分

が利益を得るよりも、愛する人を助けることが切実な「自分の本当の願い」になっていました。

この聖書箇所で説教をする人は、自分の信仰が比較的健全な時／信仰が歪んでしまった時、それぞれを思い出してみましよう。それぞれの場合に何を自分の楽しみ、喜び、願いと考えていたか、一步客観的に考えると、どちらの場合に感じた喜びが深い本当の喜びだったかが分かり、生徒に証しすることができます。

9月10日 詩119篇 143節

苦難と苦悩がわたしにふりかかっていますが
あなたの戒めはわたしの楽しみです

《聖書理解のために》

詩119篇は、若者に対する信仰教育のための詩とみなされています。א、ב、ג…と、各段落の最初の文字がアルファベット順になっているので「アルファベットの詩」という標題がついています。143節は137節のツァデ(ז)から始まる詩です。

137-144では「自分は神の教えに従っているのに、悪い人たちが自分を苦しめる」という悩みを神に打ち明けています。しかし私たちは誰でも「自分が正しい」と考

えてしまうので、相手は逆にこの詩人が悪いと思っている
かもしれません。人間関係がうまくいかないままでは、楽
しみも半減してしまいます。相手にも悪い所があるとして
も、自分の問題を発見できたら改善の道が拓けます。詩
人はずっと神の戒めを学んでいたのです、自分の罪にハッ
と気づき、我に返って敵と和解できた経験を思い出したの
でしょう。

《説教作成にあたって》

CS生徒だけでなく大人の信仰者も自分の「楽しみ」を
追い求め、そのために人間関係を損ねます。そんな私た
ちがCS生徒に対して説教できるのは、私たちが自分の罪
を認め、悔い改めることを志しているからです。悔い改め
の志は、神の戒めに親しんでいるからです。そのことを生
徒に証しましょう。

9月17日 詩27篇

(説教者は1節程度を自由に選んでください)

《聖書理解のために》

本詩は、自分だけが正義と思って敵を呪い、神に助け
を求める身勝手な詩です(2、6、11、12節)。ところが身勝
手に祈っていても、神は答えてくれません(7)。詩人

は自分がきちんと神の御前に立っておらず御利益を願っているだけであることに気付き、聖なる神の御顔を尋ねもとめる決意をします(8)。すると神の答えが聞けないのは自分に問題があることを感じ始めます。自分の信仰生活、神に隠れられてしまうか、または神の怒りにあうか、どちらかであることが分かったのです(9)。そこで詩人の関心は、神の示す道に従うことに変わりました(11)。

《説教作成にあたって》

自分を正しい道に引き戻してくださる主ときちんと交わりを持ち続けることが、自分にとっての本来の喜びだと知ったのが、年度聖句の4節です。そうした理想的な信仰に届く前には、上で述べたように多くの葛藤があり、色々な体験をします。上の説明を参考に、自分の体験によく合う節を選んでCS生徒に紹介しましょう。

9月24日 ルカ福音書 第15章 5、6節

そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであらう。

《聖書理解のために》

譬え話全体の主旨は、神は人間一人一人を大切にしているということですが、ここでとりあげた5, 6節が今年度および9月のテーマと直接関係します。イエスは譬え話の中にあえて隣人を登場させます。古代であっても都市社会では個人主義化がすすみ、羊飼いが「友達や近所の人々」と一緒に喜ぶことは困難です。今日の聖書から喜びは分かち合うべきものであることに気付かされますが、「分かち合うべきだ」と強要されても、それで分配できるのは食べ物などの物質です。それだけに、もし「喜び」が共有できれば隣人としての関係は深まります。

《説教作成にあたって》

自分が大きな喜びを体験した場合と、直接の利害関係のない知人の喜びに接した場合と、それぞれについて、説教をする人は自分の体験を思い巡らしてみましよう。後者であれば、最初は迷惑に感じることもあったかもしれませんが。すると自分にとっての大きな喜びも、他人と分け合えるものとそうでないものがあることに気付きます。説教者自身の願い(年度のテーマ)や、説教者が今楽しみにしていること(月間テーマ)と、喜びを分け合うこととをすり合わせて考えてみましよう。物は器械的に分配できますが、喜びを分配するには相互の愛が必要です。

 *wa*  
Hiratsuka Kyokai 